

『仮設のトリセツーもし、仮設住宅で暮らすことになったら』

(主婦の友社、2012年2月)

正会員 岩佐明彦君

「仮設のトリセツ」というタイトルは軽妙である。内容もトリセツと題しているとおりに、多くのイラストや軽快な文章で綴られている。どこからでも簡単に読める非常にわかりやすい本になっている。

これまで、建築分野では「建築をいかにつくっていくか」ということに寄与する知見や理論を整理し、それを専門家に体系づけて提供することを主眼とした、研究蓄積の社会還元がなされることが一般的であった。ストック型社会と呼ばれるようになってようやく、コンバージョンやリノベーションといった改修系の建築計画が注目されるようになってきた。そのことによって、さほど建築の専門知識を駆使する必要が少ない領域が拡大し、専門家ばかりではなく一般ユーザーも建築プロセスへ参加するようになってきた。そのため、それをスムーズにさせるための知見の提供が、社会から求められるようになってきている。こうした中、東日本大震災後の仮設住宅居住という、ユーザーにとっては初めての経験となる住居の場において、居住者が生活の質を回復していくための建築的手立て、すなわち仮設住宅の住みこなし方に関する多様な知識の提供が、建築学分野に要求されることになった。本書は、こうした社会的要請に意欲的に応えたものである。

しかし、本書は東日本大震災の発生後に急ごしらえで作成されたものではない。本書が上梓される前にすでに「仮設のトリセツ」は著者の研究室の活動としてWEBで公開されていた。数多くのダウンロードがすでに行われており、本書はその内容を再編成して出版したものである。その資料は、中越地域において2004年から2007年にかけて発生した水害・中越地震・中越沖地震により建設された計5,500戸の仮設住宅での奮闘から得られたノウハウ集である。多くの方が不自由な生活をする中での生活の工夫や知恵が綴られている。また、断熱や遮熱、騒音対策など環境工学的な側面も掲載されている。この時の地道な研究活動が東日本大震災時の仮設住宅の生活の質向上に寄与したのである。さらに本書は、背景にあるWEBやTwitterによる情報交換なども含めて著作賞として評価すべきであろう。そのような意味で、新しいメディアのあり方にも一石を投じている。

本書は建築分野だけではない多方面の分野から注目され、紹介されてきた。特に仮設住宅では評判の書物として、実際居住者の住みこなしの工夫に寄与している。建築学的知見の社会貢献のあり方の典型的な例を示している。

よって、ここに日本建築学会著作賞を贈るものである。